

みんなで『シビックプライド』を育む 地域学習の場

熊本大学熊本創生推進機構 准教授 田中 尚人

最近、中学生や高校生に SDGs に関わる講話、まちづくりや地方創生において「持続可能性がなぜ重要なのか」という話をするが増えている。持続可能性は今や、学校だけでなく社会教育や政策立案、観光やまちづくりなど、あらゆる場で重要とされている。持続可能性は、ふるさとの日々の変化と向き合い、多様な人々が対話することによって涵養していくことができる地域固有の本質的価値と深くつながっている。これに気づくことができる資質が、シビックプライドである。

本稿では、内と外、市民と行政、若者と高齢者などが「混ざる」ことによって豊かな学びの場となった地域学習の現場を紹介し、シビックプライドを育む場のデザインについて言及した。

1 シビックプライドとは何か

相手「田中先生って SDGs の講話されるんですよね？」

田中「はい、やらなくはないです。何が目的で、その講話をするんですか？」

相手「！？…ちょっと考えてきます（笑）」

最近、こんな会話がきっかけで、中学生、高校生に SDGs に関わる講話、より正確にいうと、まちづくりや地域づくり、地方創生において「持続可能性がなぜ重要なのか」という講話を行うが増えている。そして、面白いのは、その担当者は必ずしも学校の先生ではなく、社会教育主事や、政策や企画、観光部門の自治体職員であること。そして僕の講話には、たいてい『「まちづくり」と言わない、まちづくり』という不思議なタイトルが付けられる。

初めて SDGs を絡めた講話を行ったのは、2019 年の夏だった。まずは書籍¹⁾や外務省の「JAPAN SDGs Action Platform」²⁾のホームページなどで勉強した。図1に示した「2030 年までに達成すべき 17 の目標」に目が行くのだが、勉強するうちに「SDGs 実施指針」に書かれていた「実施のための主要原則」がより重要ではないか、ということが分かってきた。以来、「何に取り組むかも大切だけど、

どのように取り組むかがより大切」と実施のための主要原則の5つを、子ども達に丁寧に伝えるようにしている。

- ①普遍性：偏りなく、みんなで考える「先進国を含め、すべての国が参加」
 - ②包摂性：相手を否定せず、まず受け入れる「人間一人ひとりに着目して、誰一人取り残さない」
 - ③参加型：自分ごととして考える「すべての人に役割がある」
 - ④統合性：切り捨てずに、まるごと取り組む「社会・経済・環境に統合的に取り組む」
 - ⑤透明性：嘘、偽りなく前向きに「定期的に見直す」
- SDGs の中心問題は、やはり Sustainable「持続可

図1 SDGs の 17 の目標



能性」である。僕は、地域の諸課題に対してSDGsを設定して解決していこうとする勇氣は、シビックプライドから生まれると考えている。SDGsに取り組む5つの原則は、僕たちがいままで取り組んできた、「持続可能なまちづくり」と何らかわることがない。

5つの原則を聞いた生徒達が、「みんなで取り組む、誰にでも役割がある、終わりが無い」などとぶつと話し始める。よしよし、準備ができた。

2 まちづくりの持続可能性

シビックプライドが支えるサステナビリティ＝持続可能性とは何だろう。よりシンプルに、持続性と変化について考えてみたい。

時代や場所が変われば、価値観や当たり前が変化することは当然だ。変化する価値観や社会の醸成に抗って「持続性」を訴える努力も尊いが、「持続可能性」という意味からは離れる気がする。

真の持続性とは、その本質的価値を見失わず、変えるべくは変える、変化と一体的に考える必要がある。つまり、持続可能性とは、「不易流行」と言われるように、変わらないことと変わっていくことの両方を受け入れる「変化していても、持続することができる価値観」であるといえる。

人や社会は本能的には変化を好まない。何か問題や困ったことさえ起らなければ、うまくいっている今のままがいいのである。しかし現代は、世界的な気候変動やCOVID-19など感染症の蔓延によって、これまで通用した当たり前が通用しない状況にある。特に日本は災害が激甚化、頻発する中で、高齢社会を迎え、これまでの社会構造では社会的な諸課題に対処することが難しく、今まさに変化が求められているのである。

そして、サステナビリティと対に考えたいのが「レジリエンス＝回復力」である。平時には、硬直化した事象を時代や社会情勢に合わせ、少しずつ変化させていく駆動力になり、災禍などの非日常では急激な変化をしなやかに受け止め、回復につなげる受容力となる。強く抵抗する、あるいは単に元に戻す力というより、「変化を受け止める、和らげる力」だと言いたい。

サステナビリティもレジリエンスも、コミュニ

ティや社会に風土として備わっており、日常と非日常の繋がりの中で育まれる力である。多様な人々が、ふるさとの日々の変化と向き合い、対話することによって気づき、涵養していくことができる本質的価値である。これに気づくことができる資質が、シビックプライドである。

3 地域を学ぶ場^{しつち}を設える

伊藤香織さんは、シビックプライドを「都市に対する市民としての誇り」^{3, 4)}と定義している。単に地域に対する愛着を示すだけではなく、「シビック」には権利と義務を持って活動する主体としての市民性という意味があり、シビックプライドには「自分自身が関わって地域をよくしていこうとする、当事者意識に基づく自負心」という意味が内包されている。

僕たちの研究室では、このシビックプライドを「まちや地域に対する愛着や誇り、自負」と定義して、子どもから大人まで、地域学習とくにまち歩きの中で、これを涵養することができる、と考えて活動している。

よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を学校と社会とが共有すると謳われた平成29・30年改訂学習指導要領において、小学校教育課程においても「能動的で、主体的な、深い学び」をアクティブラーニングの観点から提供することの重要性が指摘⁵⁾されている。従来から、小学校中学年の社会や総合的な学習の時間で取り組まれていた「地域学習」は、この「能動的で、主体的な、深い学び」を学校と地域社会が協働して、子ども達が主体的に学ぶ機会となってきた。

近年では、少子高齢化、過疎化などの影響から、地域コミュニティの衰退が叫ばれ、まちづくりの主体不足から、高校生など学校に寄せられる期待も大きい。実際に、コミュニティスクールなどの取組みを積極的に行い、高校生や中学生が地域の課題解決に一役買う、ということもアクティブラーニングのよい現場になるだろう。

僕たちが参加者と一緒につくる現場、地域学習の多くは、文化的景観⁶⁾の保全を目的とした場である。文化的景観とは、文化財保護法第2条第1項第5号により規定された「地域における人々の生活又は生

業及び当該地域の風土により形成された景観地で我が国民の生活又は生業の理解のため欠くことのできないもの」である。この景観地の本質的価値は、地域固有の自然環境、歴史、生活・生業により特徴づけられるのであるが、地域住民にとっては当然の価値であり、気づきにくいものであると言われる。そこで、僕たちはこの本質的価値を、地域アイデンティティ「地域らしさ」などと翻訳し、多様な主体と一緒にまち歩きなどをする中で、これに気づく地域学習の現場を設えるのである。

この地域学習の現場には、主役である子ども達他に、多くの本気の大人が集う。地域住民を始め、学校の先生方、様々な文化財やまちづくり、刊行の専門家や、企画、観光、地域づくりなどを担当する自治体職員、あるいは県や国の関係者など、本当に「ごちゃまぜ」の風景が見られる。この「ごちゃまぜ」が場と成る、ありのままの地域を学ぶ場が設えられるのである。

4 シビックプライドを育む場

ここでは、内と外、市民と行政、若者と高齢者などが「混ざる」ことによって、豊かな学びの場となった「地域学習の現場」を紹介する。

(1) 熊本市南区のまちづくり⁷⁾

2014年度、僕は前年度より協力体制にあった熊本市立日吉東小学校4年生担任堀尾和美教諭とともに、3クラスに分かれている4年生の総学「未来へ～わたしたちのふるさと日吉東～(70時間)」及び社会科「郷土をひらく(13時間)」の単元にて、シビックプライドの涵養に繋がる教育プログラムの開発を試みた。具体的には、教材作成⁸⁾やまち歩き⁹⁾、マップづくりに対して僕が景観論や土木史、まちづくりに関する専門的知識を提供した。また、この日吉東小学校の活動成果は、日吉東小学校が立地し、僕がまちづくり懇話会会長を務めていた熊本市南区のまちづくり施策に活用された。

堀尾教諭と話し合い、シビックプライド涵養につながる以下の狙いを達成できるようなプログラムにすることになった。

- ・自らたてた課題について友達と協同して調べ、わかったことをわかりやすくまとめることができる。

- ・仲間と協力して活動することができる。
- ・他の地域と日吉東とのつながりを知り、地域の一人としての自覚をもつことができる。
- ・先人への尊敬や感謝の気持ちを表現することができた。

おおよそ1学期に「まち探検」、2学期に「まち歩きマップづくり」、3学期に「なかよし交流会」を実施した。全課程終了後、各課題において小学生がシビックプライドを身に付けるきっかけや、その過程について考察した。

①まち探検

まち探検では、歴史、自然環境、生活・生業の3軸から、地域固有の本質的価値を理解する文化的景観の考え方を通して、「れきし、しぜん、くらし」から目に見えるもの、見えないもの様々な地域資源を「知る」ことで、地域において「私」という存在を認識できたと考える。まち歩きの中で、地域の大人と出会い本物(実物)を見た時の心の動きなどから、驚きや感動、尊敬などといった感性や情緒を育てられることは大きい。子どもの思いを育てるには、現場で現物と出合わせ、人と対話することが重要である。

②まち歩きマップ

マップづくりでは、自分たちで集めた情報を基に、グループでテーマに即した地図をつくる具体的な目標があったので、意欲的に活動できた。実際に描いて表現するためには、紙面と現地とを結びつける必要性が出てくる。それが改めて、まちを見直すきっかけになった。できあがったマップをバザーの時に掲示し、地域住民にも見てもらい感想をもらうこと

図2 日吉東小作成の南区のまち歩きマップ



で親近感を持って頂けた。

③なかよし交流会

交流会では、地域住民と実際に交流することで、地域社会における自分達とは異質な他者との関係性について理解できた。

学校では地域の方々に見守られながら登下校や行事、学習を行っていることから、子どもたちの中には、ややもすると「してくれて当たり前」のような感覚がある。交流会の準備でも、自分たちが「遊んでもらう」という発想から抜け出すのに時間がかかった。

話し合いでは、自分達が暮らす「まち」について輪になって「対等に」話し合うという初めての経験をした。自分達が暮らすまちに対して無関心・無頓着であった児童が、自分の目から見た「まち」を、自分の言葉で語ることで「自分もまちに住む一員なんだ」という感覚を味わったと考えられる。

今回の取り組みでは、児童が自分たちの「まち」の中での立ち位置に気づくことを繰り返し経験し、「今度は自分たちが行動する」とまちづくりを自分ごととしてとらえ、立ち上がった時に、シビックプライドが醸成されたのである、と考えた。

(2) 復興は木山中からプロジェクト

熊本地震からまる2年が経った2018年度の2学期、僕は益城町立木山中学校の生徒たちと一緒に、記憶の継承を目的とした『復興は木山中からプロジェクト』に取り組んだ。これは木山中の生徒として被災した生徒たちが卒業してしまうので、何とか生徒同士の語り継ぎや、中学校としての記録を残したいという木山中の教頭先生からの申し出に基づく活動であった。ちなみに『復興は木山中から』は、熊本地震の翌年に校長先生が掲げられた木山中のスローガンである。

私は仲間とともに、中学校の先生方と打ち合わせで、「子ども達にやらされ感がなく、能動的に学習できること」を念頭に、「益城町の今を未来に伝える」30秒ワンカットの動画を撮影することを課題とした。

この年木山中の1年生は3クラス91人、各クラス6人編成で5チームでき、学年では15チームとして動画撮影を始めた。初回授業を2学期始まって

すぐの9月第1週に行い、それから5週間、大きく3つの課題（自分CMづくり、校内撮影、校外撮影）に取り組み、完成した各班の動画作品を、担任の先生方が編集して文化祭にて上演したところ、保護者や他の先生方からもたいへん好評だった。文化祭で発表した生徒達の作品を編集した動画は、平成30年度熊本県ICT大賞（学校部門）を受賞することができた。

生徒たちは、自分自身や自分が通う中学校、そして自分たちのふるさとである益城町について、どのように撮影するのかを考え、撮影場所をロケハンすることで、それらの今を見つめ、考える機会を豊富に得た。また、チームで動画のストーリーを考え、監督、カメラマン、キャスト、タイムキーパーなどの役割分担を行い、「伝えたいことは何か」について真剣に話し合ったり、地元の方々にインタビューしたりして、多様な主体と一緒に作品をつくる難しさや楽しさを学んだ。担当した1年生担任の先生方からも「生徒たちが能動的に本気で取り組む姿を見て、自分たちも学ぶ姿を再認識できた」などの意見を頂いた。

『復興は木山中からプロジェクト』において特に興味深いのは、生徒たちに対して行った事前／事後のアンケートでの変化である。多くの生徒が、現場にて益城町や木山中学校の今を伝える映像作品をつくることで「改めて、益城町や木山中の特徴や、人々が何を考えているか、そして何に対して自分たちが感謝すべきか」などを考え、言葉にしていた。体験や過去のできごとなどの無形のコト、実際にそれを演じたり語ったりするヒト、花や野菜、果物などのモノ、そして川や山、校舎や商店、田んぼなどの場

図3 木山中の生徒たちの動画撮影風景



所を、ひとまとまりの風景として映像に収める作品づくりが、生徒たちのシビックプライドの醸成に繋がっていることが読み取れた。

(3) 新ふるさと総合研究所

2018年度、私はもう1つこれまで取り組んだことのない新しい事業を試みた。それが「益城町新ふるさと総合研究所」という、益城町のまちづくり人材育成事業であった。熊本地震からの復興の一助になれば、という思いもあったが、それ以上に普遍的なまちづくりの手法として「ふるさと」のイメージを持つことの重要性を検証したかった。

益城町の総合計画見直しに合わせて「ふるさとについて学び、ともに考え、新しいビジョンをつくるWSを通じて、まちづくり人材を育成する」プログラムであった。町役場職員と一般市民を半々、できれば男女比も一対一で、部活のように能動的に学べる場づくりを提案した。担当者の努力もあって、20~30代の若者が14名(町役場職員7名、民間7名)集まり、土曜日朝8時から5回、その他の夕方18時からの活動5回、計10回(各回2時間)の「益城町新ふるさと総合研究所」という仮想の研究所としてWSを行うことになった。

第1回は「益城町のおいしい、もったいないを考えてみよう」というワールドカフェ方式のWSを行い、メンバーの親交をはかった。第2回はカレー屋さんで「ふるさとを考える際に、お勧めの本」の紹介を行った。第3回では、ふるさと益城町でやってみたい活動について提案を練り、第4回にて発表。第5・6回はまちづくりの実践か、ふるさとに対する考察を深めるのか議論が進まない場面もあったが、第7・

8回は具体的に「ふるさと益城町」のイメージを言語化、みんなで共有し「どんな未来があって欲しいのか」を提案してもらい始めると、独自のアンケート調査を始めたり、他の地域の取組みを調べたり、各人が「新しいふるさと像」について研究する姿勢が獲得された。

「近所の子どもの成長がうれしい町」、「地域のおばちゃん達を社長に!」、「ALL 益城で取り組みたい」など、新しいふるさとのビジョンが見え始め、そのような益城町になるために、どんなことができるのかを考えると、「地域と学校の垣根がない、誰もが学べる学校づくり」や「お互いに、応援し合うことが大切」、「高校生がアルバイトできる場を町役場内につくる」など、まさに益城町の総合計画にうたうべき内容や実行策が次々と提案されるようになった。

また徐々にメンバーの顔つきも変化してきた。自分の提案に自信を持つようになり、お互いに他者の案を認め合い、適切なアドバイスをするようになった。彼ら彼女らは、それぞれ個性的ではあったが、特別な能力を持っている訳ではなかった。しかし、お互いの意見を否定せず、それぞれの違いを認め合い尊重し、時に掛け算的な思いもかけない提案もできるようになった。

第10回目は町長、副町長への報告会。準備からプレゼンテーションまでチームとして、新ふるさと総研で研究した「新しいふるさと像」を示し、その実現のための提案を西村町長にお伝えした。西村町長もたいへんうれしそうで、ご自身の町役場職員時代を振り返り、このような仲間を持って語り合うことの重要性を指摘された。

図4 共有されたふるさとのイメージ



図5 新ふるさと総研の報告会の記念写真



この取り組みは、熊本地震を契機に、それまで持ちえなかった、ごく当たり前の「ふるさと像」を、熊本地震を経て昔ながらの繋がりの上に、新しい益城町をつくることのできるチャンスをカタチにした取り組みであった、と考える。「みんなで考えることは、全ての考えを紆余曲折しながら1つにまとめること。1枚も捨てるアイデアなんかない」という言葉が、今でもよく思い出される。

5 シビックプライドを育む場のデザイン

近頃、まちづくりにしても、仕事にしても、学校にしても、「あそび」¹⁰⁾が足りない。ここでいう「あそび」には、「play = 遊び」とハンドルのあそびのような「余白、必要な無駄」の2つの意味がある。

あそびは魅力的だ。あそびにはちょっとした冒険やチャレンジ、そして失敗も含まれている。あそびは仲間ができると、より面白くなる。相互にあそびを受け入れる社会ができると、あそびも持続可能になる。予想された結果を受け入れるだけでなく、予想外の楽しみも期待できるように、つまりわくわくするのだ。

シビックプライドを育む場をつくることになったら、ぜひ「わくわく」して頂きたい。それぞれの専門性を活かすだけではなく、いろんな専門性、世代、立場がごちゃまぜになって、いい具合にあそびが生まれるだろう。

活動の1つ1つの要素も大切だが、それらがひとまとまりになった時に生まれる場も大切だ。同じような人々が集まったら、同じような場ができるのでは面白くない。金子みすゞさんの言葉のように「みんな違って、みんないい」とお互いの個性を認め合い、その時、その場で、その仲間としかつくることのできない、かけがえのない場をつくるのが、シビックプライドを醸成する地域アイデンティティの拠り所になるはずである。

冒頭で話した、「まちづくり」と言わない、まちづくり、とは日常・非日常を通じて地域に暮らす人々が、①多様性 (Diversity)、②社会的包摂 (Inclusive)、③持続可能性 (Sustainable) を大切にして、コミュニティとして実践していく終わりのない地域改善活動を意味する。

「自分たちのことは、自分達でやる」という自治

の名の下に、各自が主体的にいきいきと、誰かと一緒に互いの違いを認め合い、また補い合って、おたがいさまの気持ちを大切に、楽しく自分ごととして参加できるまちづくりが、必要なのである。声高に「まちづくり」と叫ばなくても、呼吸をするように当たり前に他者と対話できる、真の持続可能性を備えたまちづくりが、みんなのふるさとをいきいきとさせるシビックプライドを育むのだと信じている。

参考文献

- 1) Think the Earth (編著)・蟹江憲史 (監修)・ロビン西 (漫画)：未来を変える目標—SDGs アイデアブック、紀伊國屋書店、2018.5.
- 2) <https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/sdgs/index.html>
- 3) 伊藤香織・紫牟田伸子 (監修)・読売広告社都市生活研究局 (著)：シビックプライド—都市のコミュニケーションをデザインする、宣伝会議、2008.
- 4) 伊藤香織：シビックプライドの源泉としての都市環境及び諸要素—富山市中心市街地と富山地域を事例として—、日本都市計画学会都市計画論文集、Vol.54, No.3, pp.615-622, 2019.
- 5) https://www.mext.go.jp/content/1421692_8.pdf
- 6) <https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/shokai/keikan/>
- 7) 田中尚人・堀尾和美：小学校地域学習におけるシビックプライド涵養に関する実践的研究、pp.107-113、実践政策学、第2巻、第1号、2016.
- 8) 美馬のゆり・山内祐平著：「未来の学び」をデザインする—空間・活動・共同体—、東京大学出版会、2005.
- 9) 茶谷幸治著：「まち歩き」をしかける コミュニティ・ツーリズムの手ほどき、学芸出版社、2012.
- 10) 西川正著：あそびの生まれる場所「お客様」時代の公共マネジメント、ころから、2017.